

マルクの異世界物語～ タバサのTS物語外伝～

ディア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トリステイン魔法学院にて使い魔召喚の儀式が行われていた。そして青髪の少女タバサが召喚したのは自分に瓜二つの見た目の少年(?)だった。

要はタバサのTS物語のシャルロットがゼロ魔原作のシャルロットに召喚される話です。それでもわからなきや平行世界でハーレムを築いたタバサ(男の娘)がタバサ(原作)に召喚される話です

目次

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
41	35	26	17	9	1

第1話

ここはどこだろう？ 確か、大量に絞り取られたのが原因で下の棒が立たなくなってしまうからシルフの故郷に来て治療したんだ。その治療を終えた後にシルフと一旦別れ……その後が思い出せない？ 一体どうなっているんだろう。

「そ、そんな馬鹿な……雪風のタバサが人間を召喚したぞ！」

「しかも服装以外そっくりだ！ ドッペルゲンガーだ！」

目の前に女子制服を着た僕そっくりの少女が現れる。しかしどこかで聞いたことのある声が聞こえるな。

状況を確認するために目を動かし、あたりを見渡す。そこには僕の奥さんのうちの一人がいた。だけれどもその女性は制服を着ていてしかも僕よりも若い。もしかしたら僕達の子孫なのかな？

そんなことを考えていると僕の懐刀が口出ししてきた。

『馬鹿なこと言ってるな坊主』

地下水。どういうこと？

『目の前にいる嬢ちゃんの魔力は坊主そっくりだし、あそこにいるキュルケもキュルケそのものだ』

じゃあ、あそこにいるのはキュルケだったこと？　そこにいる青髪の少女も僕だったこと？

『おそらくだが、ここは俺達のいる世界とは別世界だ』

別世界か。それにしては僕の知っている面子が勢揃いだけど。

『ああ。詳しく言えば平行世界つてところだ。何か条件が違って別ルートに行った世界……おそらく坊主が嬢ちゃんになった世界がここだろうな』

それだけじゃなさそうだよ。もしも僕がシルフじゃなくこの娘を召喚したら生徒達の反応はどうなっていたと思う？

『そりやおめえ……あー、そういうことか』

お察して何より。どうせ彼らのことだから「百合k t k r」とかそんな風に反応する筈だ。ところがそれが全くないと言うことは――

『つまり、この世界は変態が少ない正常な世界だったことか』

そういうこと。それよりもどうする？　向こうの世界でも平民のサイトや人の姿のシルフが召喚されて大騒ぎになったのに、ガリア王族の僕が召喚されたとなったら外交問題だよ。

『じゃあこうしようぜ。まずはじめに——』

地下水の作戦に僕は賛同した。

「はじめまして僕の名前はマルク。君が呼んだのかな？」

マルクの名前は僕がかつてタバサという偽名が使えなかった時の偽名。その偽名を使つて目の前の少女、タバサに近づくと頷いた。演技の時の僕よりも無口なようだ。

「貴女は何者？」

やっぱり彼女は僕のことを女の子だと思つてゐるね。いくら男物の服を着てゐるとはいえ、女顔でかつ華奢な体つきだから当たり前と言えば当たり前なんだけど成長出来てないようで嬉しくない。

魔法学院に入学して以来僕の容姿はほとんど変わらず、変わったのは身長だけという有り様。その身長も女子で一番小柄なルイズの入学当初よりも少しだけ大きくなつたくらいだもん。

『もつともあのピンクの嬢ちゃんには永遠に追い付かなかつたけどな』

……確かに僕の身長はルイズに突き放される一方だったけど、それを言わないでよ地下水。

ルイズはあの後、劇的に身長が伸び身長に関しては入学当初のキュルケと並ぶくらいになったけど、胸が全くと言っていていいほど成長しなかった為に時々アンと一緒にその事について愚痴を聞かされる。

「僕について詳しく話したいのは山々だけど、それを話すには少し人が多すぎる。後でゆっくりと話そう」

「ん……」

僕達のとった作戦は学院内でのシルフのように対応するということだ。僕と一緒にいる時のシルフは滑稽だったけど学院内ではサイトとともに二大男装女王とまで呼ばれる程度には人気で女子生徒達を男装の道に歩ませた。それと同じ対応をすれば僕の印象も変わる筈だ。

断言が出来ないのは僕の容姿が中性的とかそんなレベルじゃなく女の子そのもので、シルフのようにはなれないからだ。

「そう言うことだからミスタ。このタバサ女史の使い魔契約について話があるので学院の方に先に帰らせて貰います」

「あ、はい。わかりま……いや少し待つて頂きたい」

「何でしょうか？」

「何故、貴女はミス・タバサのことを知っているのですか？」

「生徒達の話聞いたんですよ。僕はこう見えても風のスクエアですから」

「な、なんと……！ その歳でスクエアですと!? いやその前にメイジだったのですか!?」

もしかして15歳だと思っている？ いやそれ以前に平民だと思われていたのか……確かに杖らしきものはなく、変わりにあるのは地下水という名前の短剣と杖剣だけだ。学院時代まで使っていた長杖は速度重視の僕の戦闘スタイルに合わせる為に形式上や儀礼上でしか使わなくなった。それ故にここにはない。

「ええ。尤も貴族ではありませんのでお気遣いなく」

少なくともこの世界の貴族ではない。今の僕はマルクという貴族崩れの傭兵の青年とすることになっている為に嘘は言っていない。

「いえ、詮索してしまい申し訳ありませんでした。ではミス・タバサ、先に学院の方に戻るように」

タバサがそれに頷いて、フライを唱え学院の方に戻っていった。この世界のタバサは本当に喋らないし無表情だね。

『まあこれで第一段階は完了だ。次はあの嬢ちゃんに説明だぜ』

そうだね。なんなら地下水が僕のことを説明して、彼女の記憶を読み込んでおけば互いに情報交換が出来るよ。

『だな。俺の存在はあまり知られたくないがああ嬢ちゃんの持つている情報は俺達の情報の価値よりも高い』

歴史とかそう言ったものを知るには図書館でもいいけどガリアの情勢とかそう言った類いの情報は彼女でしか手に入らないし。それにいくらかでも僕達の記憶を捏造することくらい出来るでしょ？

『坊主腹黒いな。いつか刺されても仕方ないぜ？』

僕はガリアの王族、それも王位後継者第一位だからいつ刺されるところか暗殺されても仕方ない身分だけだ。だからこうして杖を変えてまで戦闘に特化させたんだよ？

『そういやそうだったな。坊主は王族よりも魔法戦士が似合うな』

魔法戦士……カッコいいじゃんそれ！ 今度から魔法戦士って名乗ろうかな。あ、でも魔法戦士って戦うメイジのことだからそんなに意味ないのかも？

『まあ、んなことはどうだっていい。早くしないと嬢ちゃんがキレルぜ』

あ、そうだった。それじゃ行こうか地下水。

『おうよー！』

しかし僕は肝心なことを忘れていた。僕はシルフの故郷でEDを治療する際に、自分の身体の一部が風韻竜になっていて、それが身体に付着している僕の息子を活性化させている。その副作用として魔力が過剰なまでに膨大になっていてコントロールが出来なくなっていた。

「フライ」

その呪文を唱えた途端、僕は遥か上空へ旅立った。

悲鳴すらも上げられずただひたすらに上空に行く僕と地下水。これを止めるにはイメージだ。

『坊主、過剰に魔力を送り過ぎだ！ もっと抑えてくれ』

ゴメン地下水、抑えてもこれなんだ。空気の塊に乗る感じでいいかな？

『だああ、聞いちやいねえ！ だけど結果オーライだ。あのまま空の果てに行っていたら燃え尽きていたぜ』

燃え尽きていたとは物騒な話だね。しかし上空になるに連れて燃え尽きる前に窒息するかもしれない。

『危ないところだったな……しかし坊主、意図していきなり魔力をあんなに送り込んだって訳じやなさそうだな？』

もしかしたら僕の魔力が大幅に増幅されているのかもしれない。今回のことを含めてこれから僕が魔法を出す時過剰に出しすぎる可能性が高いから制御出来るようにしない。

『俺も協力するぜ。俺としても坊主が死んだらデメリットしかねえし、何よりも……あのハーフェルフが恐ろしい』

そう言えば地下水の天敵だったのを忘れていた。

第2話

「お帰りなさいませご主人さ——痛っ!? ちょっと、止め！」

シックなメイド服を着て、部屋で出迎えると無言で殴られたのでガードすると杖で顔を押し付けられる。

「元の服に着替えて」

「わ、わふありまひゆた、ごひゆひんひやま」

「敬語はいらぬ。それにタバサでいい」

「わかつたよ、タバサ」

しかし解せないな。胸をモロだしにしていなどころかミニスカでもないのに注意されるなんて。胸をモロだしにしたミニスカメイド服を僕が着ると奥さん達がケダモノになって僕を襲撃するというのに。

『坊主も染まってんな。昔の坊主なら進んで女装なんてしなかつたぜ?』

……確かに。次期国王としてのストレスが貯まっていたからそのストレスを解消する方法が女装して奥さん達に構われるようになったんだよ。

『昔の坊主が見たら錯乱しているな。あの変態の血を受け継いでいるってな』

……何も言い返せない。

「これで良いかな？」

「ん。そこに座って」

元の服に着替えて終わり、それを確認させると言われるがままにベッドに座るといきなり杖を向けてきた。

「貴方は何者？」

先ほどの怒りとは別の感情を入り混ぜたタバサの声がその場に響く。

「僕はただのマルク。スクエアメイジの傭兵だよ」

「その青い髪はガリア王族の証。つまり貴方はガリアの王族。だけど現在ガリア王族に男は一人しか存在しない」

「オルレアン公と一言で言えばわかるかな？」

絶対に理解出来る訳ないけどからかうには丁度いいや。間違いでもないし。

「オルレアン公は王弟等の王族関係者がつく役職。貴方がそれを名乗るということは王族関係者ということになる。だけど私の知る限りオルレアン公に就いた貴族の中に貴方はいなかった」

「歴代のオルレアン公の肖像画が間違っているかもしれないよ？ 君のお父さんとか美化100倍増しで——」

「ウインデイ・アイシクル」

殺意入り混ぜた氷の槍が僕に向かってくるが僕はそれを魔法を使うことなく地下水の刃を使っていない。

「流石に人を殺すような魔法はよしてよ。僕だって人間なんだからこれを受けたら死んじゃうよ?」

「何故貴方が私の素性を知っているの?」

「無視は良くないよ。そのせいで様々なトラブルに巻き込まれるんだから」

「答えて!」

今日一番タバサが感情をむき出しにして杖を向け僕に問い詰める。

「タバサ、聞けば何でも答えてくれるって勘違いしてない? ましてやこんな脅しでね」
タバサの杖を弾き飛ばし、逆に地下水をタバサの首に突きつける。

「……っ!」

「少し頭を冷やした方が良いよ。普段のタバサなら答えに導けるはずだからね」

僕が地下水を引つ込めるとタバサは少しは冷静になったのか杖を拾うような真似をしなくなった。

「……」

さあ地下水出番だよ。僕の素性をほめかす程度に話して向こうの情報を抜いて来るんだ。

『雑な使い方だな。まあいいか』

「それで納得ができなかつたら僕をそのナイフで刺して欲しい」

まあナイフで刺された程度じゃ死なないけどね。

『まあ坊主の生命力はどんなに死にかけても不死鳥の如く蘇り、パワーアップしてくるからな。絶倫になったのもそれが原因なんじゃないのか？』

それとこれとは関係ないと思うよ。……あの変態とデブを思い出すとそうでもないのかな？ いやあの二人とは違う。そうと願いたい。

『女装マゾのくせに？』

女装マゾじゃないから！ ……でもあの二人は女装していたよね。デブは痩せれば女顔だし、あの変態はもはや美女そのものだった。それを考えると……いや考えるのはよそう！ そういうことだから宜しく！

「……」

「それじゃ僕は食糧の調達でもしてくるから宜しく」

僕は扉に手をかけ部屋の外に出ると地下水が情報を抜き取る。悪どいけどこのくらは我慢してもらおうよタバサ。

図書館に行き、資料を集めていると隣にキュルケが座る。

「はあい、傭兵さん。何を見ているのかしら？」

「どうもキュルケ嬢。大したものじゃないよ。ここの状況を知るための本を読んでいるだけだよ」

「私を知っているの?」

「まあルイズ嬢の口から君の名前が出てきたからね。もちろんルイズ嬢の名前も君から聞かせて貰ったよ」

「へえ……流石スクエアなだけあるわ。それで傭兵さんの名前は何ていうのかしら?」

艶つぼく、そして甘い吐息を出すように僕の名前を聞く。普通ならキュルケにメモロメ口になるけど僕の世界のキュルケが僕のツボに当ててきたのでこちらの世界のキュルケ程度では魅力されない。

「あの時自己紹介したでしょ?」

「遠くて聞こえなかったのよ。それに貴方の口から改めて自己紹介してくれると嬉しいわ」

「マルク。【氷竜】のマルク」

【氷竜】なんていかにも14歳の自己顕示欲の高い子供が名乗りそうな二つ名だけど、そう名乗ったのには理由がある。僕が最近呼ばれる中でこの二つ名しかまともなのがなからだ。

その他の二つ名？ 【絶倫】、【変態男の娘】、【女装王子】、【最強チ○コの持ち主】、【つかあのおっさん、学院卒業から見た目変わらないんだけど】とか、もはや文章になっている二つ名まである。

ね？ それならまだ【氷竜】の方がマシでしょう？

「氷竜のマルクね……そういえばマルク。貴方、タバサの使い魔よね？ タバサはどうしたの？」

「そういう君こそタバサの何なのかな？ これかい？」

僕がそう言つて小指を立てるとため息を吐く。

「色ボケ扱いされることはあつても百合の花に興味を持たれていそうとは思わなかったわ。……あの娘とは友達、いえ親友の関係よ」

親友か。僕もそんな感じだったよね……懐かしいな。優しいのは今も同じだけどね。

「じゃあ薔薇には興味——」

「あるわけないでしょうが！」

薔薇——つまり、BLのことで腐った婦人達がそれに多いに興味を持つ。しかしそれに興味を持たないのはやっぱりこの世界はまともだ。僕の価値観はこちら側に近い……近いよね？

「それなら結構。何せ僕の容姿が女の子そのものだからね。僕を題材にして腐った小説やら漫画やらを書く人がたくさんいたから警戒していたんだ」

その中で特に人気を集めたのが僕が受け、ロレーヌが攻めのエロ漫画だった。ロレーヌは何でもマウントを取ればいいのか満足していた……それでいいのかと突っ込みたくなる。

「漫画って何よ……それに腐った小説って本が腐るの？」

そう言えばこつちの世界にまだ漫画はないんだっけ。漫画は才人こと彩人が持ち込んだ書物の概念で、絵が中心となつて物語が進むから文字が読めない平民や貴族の子供達には大人気のものだ。

「腐った小説の意味は知らない方がいいよ。知ったら二度と戻れなくなるし」

「そうね……そうしておくわ。ところで貴方のルーンはどこにあるのかしら？」

キュルケが一息吐いて話しを切り替えた。

「正確に言えば僕とタバサはまだ主従の関係じゃない。スクエアメイジを使い魔にする
と面倒事しか生まれないからって理由で保留されたんだ」

「それはごもつともね。あの子らしいわ」

「だけどあの娘のフォローはするよ。タバサは僕の娘みたいなものだしね」

「娘って、貴方一体いくつなのよ？」

「28歳だけど？」

「に、にじゅうはっさい？ いやタバサの年齢を考慮してみても16歳でしょ？」

「失礼な。社交界デビューした息子や娘もいるよ」

「社交界デビューって、貴方傭兵じゃなかったの？」

そこを突っ込むか。なら仕方ない。

「僕の子供は優秀だからね、養子入りしてデビューしたんだ」

養子入りしたのは真つ赤な嘘だけどころでも説明しないと説明がつかない。

「おかしいわね……そんな話あったかしら……」

ぶつぶつとキュルケが思考しているうちに席を離れる。

そして始祖ブリミル神の絵本を見つけ、手に取ると光が僕を覆い、気がつくどブリミルに保護されていた。

第3話

光に包まれた僕は図書室どころか屋外にいた。

「またか」

これで二度目となる絵本によるタイムスリップ。一度目はブリミルが衝撃的な性癖の持ち主なお陰で何もかもが動揺してしまっただけ、二度目となれば流石に慣れてしまふ。流石にアレを超える出来事なんてないからね。

「おや……起きたかい？」

「Mの人！」

「いきなり初対面の人に失礼だね君は!？」

ブリミルと言えばM。それは僕の世界の話であつて、この世界のブリミルはどうなんだろうか。そんな事を考えていると思わず声に出してしまった。

「だってMっぽいし」

「初対面の人に初めて言われたよそんな事！」

「初対面の人に変態行為を見せつけられた僕の気持ちが変わる!？」

「逆ギレ!? そんなことを僕に言わないでよ!」

それはごもつともだ。でも異世界の貴方は変態そのものだったよ。それに所詮これは絵本の中の登場人物だ。僕が干渉したとしても何も怖くない。

「そんな事より、弟子のフォルサテは?」

あの人がいるだけで会話が倍進むんだけど。

「そんな事って……それに僕は弟子なんかいないし、僕の知り合いにフォルサテなんていないよ」

「ん?」

それはおかしいな……もしかしてこの世界は常識人のフォルサテがいなかったからブリミルがまともになった世界みたいだ。

「それに君の名前は? 僕の事を知っているみたいだけど名を名乗らずに一方的にまくし立てるなんて失礼じゃないかい?」

何てこった……(異世界では) 非常識人のブリミルからそんなことを言われるとは思わなかった……

「僕の名前はマルク。別の世界の貴方の子孫にあたる」

「別の世界とはいえ僕の子孫がこんな非常識人なんて嫌だあああつ!」

「ちなみに別の世界の貴方は僕ですら霞むほどの非常識人&変態だよ」

「聞きたくない聞きたくない！」

事実を告げるとキヤラ崩壊を起こし耳を塞ぐブリミル。仕方ないよね。別の世界の僕が変態ドM野郎って知ったら嫌になる。……僕は違うのかって？ 僕は変態でもドMでもないから違うよ。この世界を知らない非常識人ではあるけど。

「絶対に子孫の教育は間違えない……」

その一言が始祖ブリミルの始まりであった——なんて書かれるんだろうな。世界に影響していれば。

「そう言えば、サーシャはどこにいったの？」

二人はなんだかんだいいつも仲が良かったからね。それだけに解せない部分も多数あるけど。

「何故サーシャのこと……ああ、僕の子孫だからか」

貴方の子孫でもサーシャを知っているのはごく一部だけだよ。子孫で知っているのは僕、ルイズ。その他の人間だとサイトのみだけだ。

「ちなみにそのサーシャはSの人」

「うわあ……確かにサーシャの本性を知っている君が僕のことをMの人と言うのは納得

だよ。顔を真つ赤にさせて蛮族とうるさいし」

ルイズみたいな感じかな？ ルイズはテレると「うるさいわね！」と顔を真つ赤にして怒るしね。

「女の子の扱いは気をつけてね。僕も大変だったからわかるよ」

「君から謎の説得力があるのは何故だろう……」

それは僕がハーレム築いているからね。……うん、見栄はり過ぎた。あれはハーレムというよりは巨大なケーキをシェアされているような感じ。

「ところでマルク君、君は異世界の僕の子孫って言ったよね？」

「聞きたい？ 子孫がどうなったかって？」

「勿論。何せ、異世界とは言え僕の子孫なんだ。その話を聞く価値はある」

「ブリミルは偉大なる始祖として称えられ、エルフは畏怖されるようになる」「何がなんでそうなったの!？」

ブリミルの疑問も尤もだ。だけど言える訳がない。

タイムスリップの経験もある僕の世界のサイトこと彩人が言うには、ブリミルは子供が出来た後、着けたら死ぬまで外れない呪いがかかった貞操帯を、ブリミルのことを快く思っただけでなかったエルフに嵌められてしまいそれ以降エルフと敵対するようになった

らしい。

それだけなら下らない理由でエルフと敵対勢力になっただけだけど、質の悪いことにエルフは先住魔法——精霊魔法の使い手でありとあらゆる攻撃を弾き返してしまふ魔法を使うことが出来る。それ故にエルフは畏怖され、恐れられる存在となってしまうた。

後半部分はなんとか誤魔化せても前半は誤魔化せる訳がない。それ故に次のことを語る。

「そしてブリミルの子供達はガリア王国、アルビオン王国、トリステイン王国、ロマリア王国を立ち上げた」

「王国か……それにしてもガリアは縁起が良いとしても、トリステインなんて名前をつけるなんて何か悲しみでもあるのかい？」

悲しみはあると言えはばある。主に王家の父系サイアーラインの直系が絶滅危惧種になっていることだろう。

トリステインの王の父系であるトリステイン貴族はヴァリエール公爵くらいのもので、国王候補に名前が連ねていることからそれがわかる。結局僕の世界では僕が王代としてトリステイン王国の政治をやることになった訳だけだ。

「そのうちロマリア王国はハルケギニアの宗教になったブリミル教に乗っ取られ、ロマ

リア共和国に名前を変えろ」

「ぶっ!？」

更に吹くブリミル。そりや自分の名前が入った宗教に自分の子孫が作った王国を乗っ取られたらそうなるよね。

「しかし直系で残っているのはアルビオンとガリアの王家のみ。トリステインはアルビオンから婿入りした王子が国王として君臨していた」

「していた、ということとはもう亡くなったのかい？」

「その通り。そのトリステイン国王が亡くなり国王不在が何年も続いているのが現状。いるのは王妃と王女のみという有り様で、トリステインの領土のほとんどがポツと出の帝国に奪われてしまう」

トリステインの歴史上、文化だの伝統だのとこだわりが強いのもあり、女王はほとんどいない。

ガリアでは王子が余りにも幼いからという理由で死んだ王の母であり王子の祖母である太后妃が息子の跡を継ぐ形で女王になった経緯がある。これは歴史的に見ても稀有な例だけど、その女王は孫が大きくならさつと隠居している。

だからか伯父様はそれを引き合いにして僕にガリアの政治を任せて隠居しようとしているが、無理だった。理由は伯父様が外交に優れすぎた国王だからだ。エルフとの外

交にあればどこまでに成功したのは歴史上どの国王もおらず隠居しようものなら返って国王やらされる期間が伸びてしまうだけで無意味なものとなる。

少なくとも僕にあればどの外交力を身に付くとしたら1000だか3000だか生きているオールド・オスマンくらい長生きしないとならない。つまり実質不可能なことだよ。いくら10代の頃から見た目がほとんど変わっていないとはいえ、寿命が100歳以上ということは無いからだ。

「なんてことだ……」

「そして現状、トリスティンはガリアの属国扱いになっている」

それから僕が辿った未来ではオルレアン領と共に僕の支配下に置かれてしまう。しかしこの世界ではタバサこと僕に該当する人物が女の子だからどうなるかわからない。

もしかしたらトリスティンの属国扱いは免れるかもしれないし、伯父様が支配してしまいかもしれない。まあ伯父様の外交力を考えれば後者になる可能性が高いと思うけどね。あれに敵う外交力の持ち主がいたら引き抜きたいくらいだ。

「そうかい……なんとも悲しいことだ。最後に聞くけど君達の世界は平和だったかい？」

「僕が生きている間は平和な事が多かった。伯父が6000年仲違いしていたエルフと仲良くしてくれたからね」

「それは良かった……さあ、もう時間のようだね」

そう言われ身体を見ると身体が透け始めていた。

「じゃあブリミル、サーシャに言っておいて。人間達と仲良くするようにと」

「そう伝えておくよ。僕としてもエルフと人間が6000年もの間険悪になるのは嫌だから」

そうブリミルが声を出すと共に僕の姿が消えて、学院に戻った。

「起きたかしら?」

そう言つて顔を覗いて来たキュルケと、それに並ぶタバサ。

「やあ、ここまで運んでくれてありがとう。迷惑かけたね。でも大丈夫——っ!」

その瞬間タバサの巨大な杖で僕の頭を叩かれ、悶絶する。

「私だけでなくキュルケにまで迷惑かけた罰」

そう言い放ち地下水を渡すタバサだが僕は一切聞いてなかった。拷問という分野において彼女はスペシャリストらしく、普段は狩りをする関係で痛みに慣れてる僕です

ら悶絶しているからだ。

「おおおお……目がチカチカする……」

「タバサ、やり過ぎは良くないわよ」

「ん、反省」

タバサが頭を下げ、それが認識出来たのは奇跡だった。

第4話

僕が悶絶していると、地下水が声をかけてきた。

『坊主も懲りねえな……』

うるさいよ、地下水。それよりもタバサの情報を抜き取った？

『あたぼうよ。とりま、嬢ちゃんの情報も渡していくぜ』

地下水からタバサの記憶が送られ、僕はそれを認識していく。あまりにも情報量が多いと頭がパンクしかねないけど地下水はその加減を知っていて、僕に合わせている。

痛みがなくなり、キュルケに外を出るような促す。

「キュルケ嬢、僕達は主従交流するけど君はどうするの？」

「そうね、あの【ゼロ】のルイズの使い魔も人間みたいだから見てくるわ。それじゃお二人さん、ごゆっくり」

キュルケが立ち去り、この場に残されたタバサと僕。タバサの性格上、喋らないことは明らかなので僕から語っていかう。

「タバサ、君は母君を助けたい？」

「っ！ どうしてそれを！」

「質問を質問で返したら駄目だよ。それでどうしたい？」

「……っ、助けてい。だけど母様を助けるにはあの男の手元から引き剥がさないといけない」

「言っておくとタバサ一人の力だと無理だよ。タバサのいうあの男は君の伯父であり、ガリア国王ジョゼフ一世でしょ」

それに頷くタバサ。やはりというべきか、戦いたくない人が敵になるとするのは嫌なものだ。

「ジョゼフ一世は「無能王」として知られており、それは本人も自称しているけど無能なのは魔法だけで実際には違う。魔法以外にも無能ならタバサ一人の力でとくに解決している。政治に関しては歴代の王でも抜けていて、特に外交においてはエルフとの交易をしていることからかなり優秀と言える」

これはタバサの記憶を読み取った限りの情報でこっちの世界でも変わらない。やはり伯父様は優秀で、敵に回したくない。

「エルフ……！」

「言っておくけど君にとってはエルフよりも彼の方が厄介だよ。彼の影響力は絶大だ。」

生半可な謀略じゃ却ってこつちが潰される」

少なくともこの世界のタバサ僕じゃ荷が重すぎる。片や歴代でもトップクラスに優れた国王、もう片や汚れ仕事をしてきたとは言え政治とは無関係に近い年若き少女。どちらが勝つかなんて言われたら間違いなく前者だ。

「……」

「タバサ、復讐を止めて母君を救うことだけを優先するなら方法がある」

「それはもう——」

「やっていないよ。今のタバサは只の奴隷だ」

経緯はどうあれこの世界でもタバサは北花壇騎士団に入団しており、その任務をこなしている。しかし僕の場合とは異なりタバサは任務をこなすことで信頼を得ようとしているが、ジョゼフからしてみればタバサは仇敵オルレン公の娘という肩書きがあり信頼は皆無だ。むしろ生かしているタバサをからかっている節がある。

「ジョゼフ一世に立ち向かうにはエルフとの交易を絶たせた上でハルケギニアで包囲網を作らないと無理だし、無駄に戦費が嵩む上に死人の出る戦争が起きてしまう。復讐の為に無駄に死人を出すのは望ましくない」

僕が伯父様に勝つとしたらそれくらいのことを前提にしないと勝てない。というかそれですら危ういくらいだ。

「ガリアで孤立させるのは？」

「甘いよ。ガリアで孤立させても貴族達が肅清される。むしろその影響力は増していく一方だ」

「ならどうするの？」

「夢から覚まさせるだけでいい」

「……………どういうこと？」

「少なくともジョゼフ一世はシャルル・オルレアン公が生きていた頃、寡黙ではあったが精神は破壊されてなかった」

「ちなみに僕の世界の伯父様も精神を壊されており、元々歪んでいたものが良い方向に向いたただけだ。」

「……………」

「他人から【無能】と侮蔑され、優秀な弟と比較され続けてきた。普通ならどこかで爆発するはず……………それでもある時までには爆発しなかった」

「従姉にあたるイザベラも魔法が優秀とはいえないのだから尚更だ。父親に似てしまったとか魔法が使えないのは父親が【無能】だからとかそういう話が出回るのは無理もない。」

「もしかしてジョゼフが祖父様に認められなかったから爆発したの?」

タバサの認識ではシャルル・オルレアン僕の世界変態が国王になったけどジョゼフによって謀殺されジョゼフが国王になったようだ。だけどそれは違う。

「いや先代国王というよりは劣等感を持っていたシャルル・オルレアン公に原因があったんじゃないのかな」

「父様に?」

「考えてみなよ。自分が何にも出来ないのに弟は魔法も完璧、自分の得意分野のはずの勉強も出来る、そして寡黙な自分とは違い社交的で性格まで完璧と来たら劣等感を持つ。そんな兄は何としてでも弟にギャフンとか言わせて悔しがる姿を見たい」

「……まさか、本当に父様じゃなくあの男が国王に認定されたの?」

流石異世界の僕。頭の回転が早い。

「そうだろうね。もしシャルル・オルレアン公が国王に選ばれたのなら悔しがる姿を見る為に敢えて殺さないだろうし」

そうキツパリと告げるとタバサがしばらく無言になる。捕らえる過程で抵抗が激しくやむを得ず殺したつてのも可能性としてあるだろうけど、シャルル・オルレアン公の死因は弓矢による射殺。最初から殺す気でなければそれは出来ない。

だから考えられる可能性としてそれはなくなく、ジョゼフ一世が国王に任命され、そ

れを称えたシャルル・オルレアン公に嫉妬して狂ったとしか考えられない。

「それは理解した。でもどうするの?」

一分後、ようやく口を開けるタバサ。理解はしても納得してないのがよくわかる。しかしそれを一々口にする必要もない。

「シャルル・オルレアン公も完璧超人ではなく只の人だったと証明すればいい」

「……どうやって?」

流石にそこまでは頭は回らないか。こればかりは年の功だ。

「実の兄弟であり、しかも非凡なジョゼフ国王だからこそ証明出来る方法がある。その為にはガリアに行つて彼に直接話さないとね」

「貴方にその方法があるならそれに委任する」

「それじゃ、公欠届けを出して行くかうか。僕は外で待っているよ」

無口とはいえタバサ異世界の僕なんだ。そのくらいは出来るし、何よりも地下水と話したいことがある、別行動をすることにした。

地下水、この世界の伯父様ジョゼフ一世から情報を抜き取れない?

『まあ出来ないことはないが、それは坊主の交渉次第だと思っぜ。そもそもあのおっさんの使い魔、誰だかわかっているのか?』

……それを考えると無理か。あのデコでしょ? 確か神の頭脳だったけ?

『まあな。ルーンによる影響があまりにも大きいが、俺のことなんか一発で見極められちまう。情報を抜き取るなんてのは無理だ』

じゃああの手しかないか。幸いなことに魔法の属性は同じようだしね。これで実は魔法の属性が違いましたなんて言われたら地下水に出来るからラッキーと言えるけど。問題は魔法の属性が違うのにデコを呼び出した時だ。それさえなければどうとでもなる。

『そうならないように願うしかねえよ。もちろん運にな』

「準備万端」

タバサが声をかけ、僕が頷く。

「それじゃ、行く前に脱ぐから——痛い痛いっ!」

タバサがガンガン杖をぶつけ僕が全裸になるのを阻止させる。

「脱ぐ必要はない」

「あるよ! 僕の二つ名【氷竜】の由来にも関わることなんだから」

そう言われてタバサが渋々取り下げる。全くいくらタバサが僕の全裸を見たくないとはいえそこまでする？

「さ、そういうことだからあっち向いていてね」

「……ん」

タバサが振り向いたのを確認すると地下水を取り出し、魔力を込めると徐々に姿を変ええる。それまでタバサよりかマシ程度の小柄だった身体が巨大化し、身体から翼が生え次第に口、手足、顔と竜そのものの姿となった。

「もうこっち向いて良いよ」

そしてその姿をタバサに見せると絶句した。この世界のタバサはどうかは知らないがこの姿はシルフの本当の姿を模写したものでその威圧感はトリスティン史上最強軍人【烈風】カリンに勝るとも劣らないほどだ。そんな奴と対峙してプレッシャーを感じないはずがない。

「なっ——」

啞然とするタバサを見て、僕は満足している。この変身魔法を身につけることが出来たのは韻竜の身体の一部を自分の身体の一部に取り込んでいるのが大きく、ED治療過程で得た魔法の一つと言って良いだろう。

「お姫様お待たせしました。この【氷竜】のマルクメがお姫様をお城までお届け致しましたよう」

そう声を洩く出すとタバサがしかめっ面で「普通の声にして」と不満を漏らしてきたので元の声にする。この洩い声気に入っているんだけど何故か女性陣から不評なんだよね。

第5話

「そうか、お前が可愛い姪の使い魔か！」

そう愉快そうに高笑いする青髭の男、ジヨゼフがそこにいた。

「ははっ、『氷竜』のマルクにございます」

口調を変え、ジヨゼフと相對する。こういう小細工でもしないと交渉において勝てる気がしないからだ。

「二つ名があるということはメイジか。これは愉快だ。まさか姪が俺と同様、人を召喚するとはな……それも姪にそっくりなメイジを！」

もしかしてこのジヨゼフはタバサのことを駒かなんかと思っっているんじゃないのか。僕の世界であれば非情に見えて優しいところがあるからよく分かる。

「陛下、ご質問がありますが発言の許可をお願いします」

「許す。何だ？」

「陛下が国王として任命された時、陛下の弟君、シャルル・オルレアン公は祝福しましたか？」

「ああ、したとも！ 俺の弟は出来すぎた弟だ！ もし俺であれば耐えられんだろうな
！」

「私が聞いた限りではオルレアン公はそこまで出来た弟とは思えません」

不敬罪に問われても仕方ないがここに来た時点で命を懸けている以上、何も恐れること
はない。

「なんだと？」

「もしオルレアン公が国王として任命されたら、どれだけ立腹されても陛下は表面上は
祝福するのではないでしようか？」

「……かもしれんな」

「陛下がそうされるかもしれない……それはオルレアン公にも言えることです。オルレ
アン公も表面上では取り繕い、裏では荒れていたかもしれませぬ」

「あり得んな。シャルルはそんなことをする——」

「もし、オルレアン公が貴殿に対して劣等感を持ち、陛下を欺いていたとしたら？」

「あり得ん！ 弟は、シャルルは——」

「国王になるのに魔法はあるに越したことはありませんが絶対に必要という訳でもあり
ませぬ。魔法が必要になる時はそれは式典の時か、追い込まれた時のみ。前者は取っ払

えば良いだけですし、後者に至つては魔法を使わざるを得ない状況まで国を追い詰めた無能な王でしかありません。それを他の貴族ならともかく聡明なオルレアン公が理解出来ないはずがないのです」

僕の父親 あの変態はともかくオルレアンタバサの父親公はそれを理解出来るだけの頭脳の持ち主だ。30を超えていない僕にだつてそれが理解出来るのだから尚更だろう。

「……」

「そして陛下が当時の国王として必要とされていた能力、つまり優れた内政と外交能力を兼ね備えていたのをオルレアン公は見破っていた。軍事を象徴する魔法ではそれに敵わない。だからこそ人身掌握をし、あたかも王としての器に相応しいかの様に振る舞つて——」

「黙れ！ その口を閉ざせ！」

「オルレアン公は亡くなりました。手の込んだ自殺でね」

手の込んだ自殺——ようするに他殺や事故に見せかけた自殺だ。この場合だと目の前にいる不器用なジョゼフを煽り殺させた。彼がそうしたかったのかは不明だが少なくとも僕にはそう見えた。

「シャルロット！」

「黙ってて」

「っ!!」

息がピッタリ合う例え——阿吽の呼吸の如くタバサに杖で金的を殴られ悶絶して暫くすると手汗が酷くなるのと引き換えに冷静になったジョゼフが僕の肩を掴む。

「マルクと言ったな？」

「は、は、は、は……」

「お前に聞こう、お前は俺が怖くないのか？」

「陛下が怖くないと言えは嘘になります。しかしそれ以上に陛下達をお救いしたい気持ちがあります」

「救うだと？ ……笑わせるなよガキが」

ドスの効いた声がその場に響き、殺気に当てられたタバサが怯む。無理もない。この殺気は僕の使い魔のシルフと同じくらいでタバサが今まで受けてきた殺気とは比較にならない。

「笑いたければ笑えばいいでしょう。しかし陛下、オルレアン公も人間であり貴方に対して劣等感を抱いていたのは紛れもない事実です」

「ならばそれを証明して見ろ」

「王家に伝わるオルゴールとルビー、そして陛下自身。それが全てを解き明かす鍵となります」

「始祖のオルゴールと土のルビー、そして俺か。本当に真実が身近にあるとでも言うのかお前は？」

「陛下、間違いなくそれらが鍵となっています。始祖に誓いましょう」

「ふ……よかろう。だがそれが偽りであった場合、わかるな？」

「私の首でも身体でも好きなようにしてください。ご主人様、それで構いませんか？」

「ダメ、貴方が死ぬことは私が許さない」

「安心しろシャルロット、こいつが肉体的に死ぬことはない。男娼として売り飛ばすだけだ」

元の世界だったら事実上の死刑宣告だ。王族ということもあるが、それ以上に容姿端麗であることで僕の知名度が高い。王子を名乗る前に僕をモデルにした春画が出回っているくらいには知れ渡っており、それを老若男女問わずほぼ全員が持っている。そんな僕が男娼にされたらどうなるだろうか？ 間違いなく即座に買い手が決まり毎日が性欲発散の対象になるだろう。

元の世界程ではないとはいえ、僕の容姿は少女、下手したら幼女そのもので男受けする。その手の趣味の貴族によって穴という穴を掘られ開発されることになる。

「タバサ、使い魔としての我が儘を聞いて欲しいな」

「……これで最後」

「イエスマム。これで僕が死んでも陛下を殺さないでほしい。殺したら全て台無しになるから」

「……………」

「わかった」

かなり長い間があつたが頷きそれに承諾する。彼女にとってはかなりの葛藤だったんだらう。

そしてその数日後、僕はメイド喫茶のメイドさんとして働いていた。

「なんでえええっ!?!」

「自業自得」

客として来ていたタバサが軽蔑するような目でそう呟いた。

第6話

僕がメイド喫茶で働くことになった数日前、ジョゼフから一人娘イザベラに挨拶するように命令され、イザベラの下に来ていた。

「ふうん……本当にそっくりだね、あんた達。顔だけだったらまるで区別出来ないよ」

「ははっ、この【氷竜】のマルク、いざとなればご主人様の影武者となります故」

「てことはフェイスチェンジの魔法でも使っているのかい？」

「いいえ。偶々私の顔がご主人様と瓜二つだっただけです」

「へえ……それだけ瓜二つの存在なのに、何故話題にならなかったのか不思議ねえ？」

「7号？」

「……彼の故郷は秘境にある。だから気がつかなかった」

「だったらなんでガリア国王の血を継いでいる青髪なんだい？」

「！」

【氷竜】のマルク、28歳。経歴不明のメイジで二つ名の由来は世にも稀なフェイス

チェンジならぬボディチェンジの使い手で氷を司る竜になれるところから来ている。……マルクが現れてからこれだけの情報を調べられたのにそれよりも過去の経歴が不明つてのはあり得ないんだよ。いくら秘境に住んでいたとは言ってもね」

鋭過ぎる……この世界のイザベラは僕の世界のイザベラよりも賢いのもかもしれない。「父上や叔父上の血を継いでいるなら父上や叔父上が真つ先にマルクを認知して自らの子供として扱うことになるから私やあんたの兄弟つて訳でもない」

「何故ですか？」

「はっ、あんた顔は似ても頭はバカのようなね。あんたは男で私達は女。男であるあんたが父上か叔父上の下に生まれていたらなら認知しないと後継者争いに響くからよ。後継者のいる王子の方がなにかと有利だからね。よしんば血を継いでなかったとしても叔父上があんたを無理やり表舞台に出したはずよ」

確かに筋は通る。もしこの世界で秘境で生まれ育っていたなら政治的に利用されていたはずだ。

「さて、【氷竜】のマルク。あんたに聞くわ。一体何者なの？」

「……王女様、それにはこちらを握って頂ければわかります。少々複雑な経緯故に」

「ナイフ？」

イザベラがそのナイフ——地下水を握ると意識を失い、目が虚ろになる。何度も見た景色で恒例なんだけどどうにかならないの？

「お仕置きね」

「へっ？」

「そのメイド、例のお仕置き服を持ってきな！」

「ひっ！」

「早く！」

「は、はいいいっ！」

メイドが慌てて外に出ていき、暫くするとメイドが持ってきたのはミニ丈のフリフリメイド服といったクラシカルな物を除いたメイド服だった。中にはシースルー……透け透けのメイド服もありいくら華奢な体格の僕とはいえ着たら男だとバレること間違いないものもある。

「さてマルク、あんたに命ずるわ」

「何なりと」

「このメイド服を使ってメイド喫茶を経営しなさい。もちろんあんたも着てね」

「ははっ」

本音を言うなら着たくないし、何ならそこにいるイザベラに着せて着せ替え人形にしたいくらいだ。

「ふん、そういう所は人形とそっくりね……決めた」

イザベラを着せ替え人形にしたいとは思っていないでしょ。などと思っていると男性、特に性欲が強い人にとって最も恐ろしいものを取り出した。

「人形、これ何だかわかるかい？」

まだ純粋なタバサがフルフルと横に振るが僕はそれを一週間だけ着けたことがある。その恐ろしい兵器の名前、それは――

「貞操帯よ。男性用のね」

イザベラが取り出した恐ろしい兵器とは男性用の貞操帯。一度装着すると鍵が開くまで自慰は当然、女の子といやらしいことも出来なくなる。更に恐ろしいのは男性用に限って興奮することすら許されなくなり、興奮したら竿に激痛が走りまともに立てなくなってしまう。

「メイド喫茶であんた自身の1日の売り上げが平均以下だったら杖を取り上げてこれ装着して貰うよ。平均を超えるまでずっとね」

なんて恐ろしいことを考えるんだこの姫様は。

「畏まりました」

「変態」

ボソツとタバサが呟くがイザベラがそれに気付かず高笑いを始める。

「楽しみねえ。取り敢えず丁度良いサイズの貞操帯にする為にマルクの竿のサイズを測らせてもらうよ。人形、そいつを取り押さえな！」

「許して」

そういつてタバサは僕の杖を弾き、僕をバインドで拘束する。無論抵抗もしようと思えば杖を弾かれる前に出来たけどそれだとタバサの顔を潰すことになるから止めた。

「さてご開帳！」

そして地下水で僕のズボンのベルトと特注のパンツを斬り、股間を見せるとそこには巨大な蛇がいて流石のイザベラも顔を徐々に紅潮させて玉座に座り込み頭を抱えた。

「え、何、あのサイズ。お父様よりも大きいんだけど……」

イザベラがぶつぶつと呟く一方で他の従者も顔を紅潮させたり青ざめたりする。

「あんな見た目であんな凶悪なモノを……あれで突かれたら……濡れるわあ……」

「なんだよあのサイズ……どう鼻屑目に見ても負けてるんだけど……」

ちなみに僕の竿を見て紅潮させたのが女従者、青ざめたのが男従者である。

「ふ、ふんっ！ とにかく続きをやるわよ！」

「ムッツリスケベ」

僕がそう眩き、イザベラを硬直させると続いて罵倒する。

「従者に任せればいいのに姫様が直々に測るなんて、そんなに僕の竿が気になるの？
変態さんだね♥？」

「な、なななっ！」

「だってそうでしょ。ご主人様に拘束させて自分はその股間のモノを見ているんだよ？」

変態と言わずしてなんていうの？」

容赦ない言葉責めにイザベラが顔を真っ赤にして震え出す……あ、やりすぎた。

「うがああああっ！」

鞭が何発も入り僕の顔をアザだらけにするとともに息を切らしながらも徐々に冷静
になっていく。

「はあーっ……はあーっ……これだけ私を辱しめにして覚悟は出来ているんでしょうね
？」

——なにこの可愛い生き物、もつと責めてみたい。

僕にそんな加虐心が芽生え、つい言ってしまった

「僕を縛っていやらしいことをするなんて姫様はSMプレイが好きなんだね」

その瞬間、何かがぶち切れる音が響き、イザベラの鞭がこれ以上ないスピードで僕を痛めつけた。

「よしクロス！」

「させない」

「人形あんた私に逆らう気？」

「違う。ここでマルクを殺したら未来永劫【変態姫】と呼ばれることになる。それを止めにきた」

「そんな訳ない！」

「ご主人様のいうことは道理だよ。姫様は無自覚だから仕方ないけどムツツリスケベも変態さんもそしてSMプレイが好きということを否定してないよ」

僕がそういうとイザベラが考え込み、しばらくすると顔を青ざめ、そして声を荒げて警告する。

「あんた達！今のやり取りは絶対に忘れなさい！忘れなかつたらどんな目にあうかわかっているんだろうね！」

「ははっ、我々は何も見ておりませぬ！」

従者一同声を揃えてそう応えた。

それからイザベラは自分で測るような真似は控えて代わりに従者が僕の竿を測ろうとするがその度にからかうと男女共に顔を赤くし、どもってしまふ。

「……もういい、私がやる。貴方達は下がって」

そんな様子を見たタバサが見かねて僕を竿のサイズのサイズを淡々と測り、からかつても一切反応せず終わらせ、イザベラに報告する。

「汚されちゃった……ご主人様に」

「うるさい」

「げふっ!？」

泣き真似をすると杖で腹を殴つてあしらうタバサ。もし同じ立場なら僕だってそうする。

「よくやったね、人形。初めてあんたのことを使えると思ったわ。それに比べてあんた達は……!？」

「ひいっ!」

「罰としてこれからマルクが働く店で私がいいというまでそこで働きな!」

イザベラがそう宣言すると特に男から絶望の悲鳴があがる

「私もメイドとして働けつてことですか?」

「誰があんたの女装姿をみたいって言ったんだい？ 厨房とか裏方で働け！」

それはそうだろう。ごつい男の女装姿なんて僕の女装姿よりも需要がない。

「マルク、あんたにも罰として一週間貞操帯をつけて貰うわよ？」

イザベラが従者の手から特製の貞操帯を奪い、それを見せつける。

「もつとも、あんたが一週間のうち一日の売り上げが一回でも1位でなくなったらこれを更に一週間つけてもらうけどね」

あ、悪魔だ……どうしてこんなことに……

「一週間、せいぜい頑張りな。あーっはっはっ！」

そしてその数日後、今に至る。他の従業員が素人なこともあり何とか連続で売り上げ1位を連続で取り続けているがそれでもかなり辛い。

「さあご主人様もやりましょう♡？」

「萌え萌えキュンキュン♡？美味しくくなくあ〜れっ！」

手で♡？を作り、営業スマイル全快でオムライスに向けてそう言葉を放つ。

……何でこんな馬鹿馬鹿しいことをしているんだろうか。死んだ目でオムライスにサービスし終えると他のメイドさんイザベラの女部下が僕に近寄ってきた。

「ねえマルク様、おっぱいを大きくする方法って殿方に揉んで貰えるといいんですって。」

そこでお願ひなんですけど、マルク様に揉んで貰えないでしょうか？」

イザベラの部下
メイドさん達はこのメイド喫茶で売り上げが僕を差し置いて1位にならないと戻れ

ないようにイザベラから命令されており、何がなんでも妨害して1位の座から蹴落とそうとしてくる。一応これまでには妨害はあつたけど、その度々何故か高評価を受け、今では僕でも收拾がつかないくらい属性過多なメイドさんとなっている。

そんな他のメイドさんが僕に対しての弱点を思い出した、といった所だろうか。貞操帯を数日間も装着している僕に色仕掛けをすることで動きが鈍くさせて、売り上げを落とそうとしたんだろう。

どうやって断ろうか、などと考えていると他のメイドさんが僕の背中にぶつかり、バランスを崩すと相談してきたメイドさんのすぐ近くに壁ドンをしてしまう。

「ふふっ、ダメだよ。そんなエッチなメイドさんは。メイドさんはご主人様に奉仕するのがお仕事なんだよ?」

自分で言っておいて訳がわからない。だけどキメ顔だったことや壁ドンの影響でつり橋効果があつたこともあり、そのメイドさんは素直に「はい……」と応えてくれた。

「マルクちゃん! 今のを俺にもやってくれ!」

「あつ、ずるいわよ、私にも!」

それを見ていたご主人様お客様が我も我もと言わんばかりに壁ドンを要求してきた。適当

なセリフで対応するとこの日一番の売り上げを叩き出す一方で背中にわざとぶつかったメイドさんは荒れていた。

その次の日、ようやく最終日となり制服に着替えるとメイド服がミニしかなく貞操帯の關係で特注のパンツを履けない僕にとってこのミニスカメイド服は、女装がバレるリスクが高く、これをしたのはメイドさんイザベラの部下だと推測出来た。かといつて嘆いている暇も責める暇もない。

シースルーのメイド服だったらもろバレるけどあれは何故か開店当日に無くなっていたから不幸中の幸いだ。

「さて、どうしようか」

ミニスカにはミニスカのメリットがある。確かに女装がバレるというリスクはあるがそれ以上に見えそうで見えない絶対領域を生み出す凶悪な武器でもある。例えばキュルケがタイトスカートを履いてそれがミニになつたら誰だつてそこをガン見するだろう。でもパンツが見えそうで見えず悶え苦しみ、さらに色々な方法で見ようと努力する。その方法を使って売り上げを稼ぐ。

その方針に切り替えて、竿を貞操帯ごと押し上げ少しでもバレないようにし出勤する。

「なにつ、マルクちゃんがミニスカなんて今日は天国か!？」

最初に入ってきたご主人様お客様が僕のミニスカ姿を見て発狂すると、僕にありとあらゆるオプシオンをつける。

「クルって回ってわおっ、一着のポーズ」

サイトが提供した電波を受信したポーズを取らされるがそれでもスカートの中身は見られることなかったようだ。

「くっ、これでもダメか! ならば仕方ない……サンクだ! サンクのルールはわかるな?」

サンク……確かイカサマ賭場だったけ。あの時は地下水が給士を乗っ取ってエコーが化したものだとかわかったんだけどあの時地下水がいなかったらイカサマをどうやって見破っていたのかわからない。そんな懐かしさを覚えていると無条件で頷いていた。

「もちろんですご主人様。やりましょう」

「よし、儂が負けたら100エキュー払おう、その代わりマルクちゃんが負けたらスカートの裾を4センチ地球でいうcmに相当する単位だが正確には異なるあげて貰おう!」

たかがスカートの裾を4センチ上げるだけで100エキューも賭けるなんて変態貴族にもほどがある。僕個人としては絶望させたいから受け入れたいけど店としては受

け入れる訳にはいかない。

「ごんね——」

「審判係として了承しましたわ。さあマルク店長、席にお座り下さい」

審判係のメイドイザベラの部下さんが口を挟み、僕に無理やりゲームをさせようとする。ここで断つたら雰囲気も悪くなるし一度だけやるか。

「ご主人様お客様、今回は引き受けましたがエツチなお願いは本来引き受けませんからね？」

「ああつ、この冷たいじと目がたまらんっ！」

駄目だこいつ何とかしないと。変態は僕の世界の住民だけかと思っただけどこの世界でもいるにはいるんだ。

「それではルールを説明します。今回行うゲーム、サンクは3回勝負。そのうち勝利数が多い方が全体の勝者としています。引き分けなどで勝利数が同じ場合は条件を折半——」

「それはいやじゃない！ 50エキュー損して得られるのが2セントしか上がらないのはいやじゃないっ！」

いやどつちでも変わらないと思うんだけど。

「——ということですので、どちらかの勝利数が多くなるまで続け、多くなった方が勝者

になります。次に――」

それからルールを説明していきゲームが始まる。そして案の定、その変態貴族はボロ負けした。そりやそうだよ、僕こういうゲームは博徒として生きていくくらいには滅茶苦茶強いもん。

その後、変態貴族、変態成金のバカ達が他のメイドさんイザベラの部下を使つても、ありとあらゆる手で負けそうとしたけど結局出来ずに終わる。

僕の売り上げ金がとんでもないことになったのは言うまでもなく、その後僕がいなくなった「テーブルゲームもやれるメイド喫茶」は「メイドさんが食事を提供する賭博場」に変わっており、その事についてかなりイザベラに怒られた。